

現代フランスの地域言語の現状

—アルザス地域を事例として—

杉浦黎(東京大学大学院生)

1. はじめに

本論文はフランスにおいて地域語を巡る動きを検討し、近年衰退が加速化してきたアルザス語がどのように公共空間に現れ、人々によって認識されているのかを足掛かりとして、地域語アルザス語維持の可能性を模索する。アルザス地域はフランスとドイツの間に位置しており、古くからラテンとゲルマンが接触する場所であり様々な視点からアルザスの言葉が注目されてきた。本論文は地域語アルザス語の現在の姿を浮かび上がらせるために言語景観の手法と非公式インタビューという二つの手法を用いる。本論文ではまずフランスにおける様々な地域語を取り巻く状況と取り組み方針の変遷を整理しながら、アルザスにおける言語研究、話者数のデータを示す。その後アルザス語に焦点を当て、研究手法、結果の提示とその分析を行っていく。

2. フランスにおける地域語をめぐる動き

フランスは無形文化遺産保護条約や文化多様性の保護推進についての協約においてイニシアティブを発揮するなど、国際社会に対してマイノリティの言語を含めた権利の擁護を率先して行ってきた。しかし、フランス国内における少数言語の言語擁護に関しては未だ問題を抱えている。フランスにおける地域語をめぐる動きを捉えるためには共和国憲法の修正についての言及が必要である。フランスは1992年にマーストリヒト条約の直前で共和国憲法を改正し、フランス語が共和国の言語であることを明記する Art. 2-La langue de la République est le français. という文言を追加した。この憲法改正は英語の覇権拡大の危機からフランス語を守るために、そしてフランコフォニーの盟主としての力を示すためのものであったため地域語の地位を脅かすために追記されたものではなかった。だが結果として欧州地域少数言語憲章への批准を検討する際にも、この規定に矛盾する点を理由として憲章への批准は違憲になるとの判断がされてきた(高橋, 2013)。

次に着目すべきは2008年の改正である。フランスは地域語がフランスの「遺産 (patrimoine)」であるとした文言 Art. 75-1-Les langues régionales appartiennent au patrimoine de la France. を追加した。この文言は地域言語を守ることは特定の話者集団の権利を守ることを意味するのではなく、フランス国民全体の豊かさを守ることを意味するとの解釈が提示された。フランスにおける地域言語をめぐる動きをさらに深く取り上げるためには「地域語 (langue régionale)」という概念の検討が必要である。「地域語」は1951年に国会で可決された「地方言語および方言の学校教育に関する法案」、通称ディクソンヌ法で生まれた(長谷川, 2000)。この法において「地域語」として認められたのはブルターニュ語、バスク語、カタルーニャ語、オック語であり、アルザス語、コルシカ語、フランドル語は「地域語」として認定されなかった。この法によって「地域語」と定義された言語は公教育機関での教育や研究が認められ、さらに1970年代からバカロレアの選択科目にも組み込まれるようになった。地域語として認められなかった言語は外国語という位置付けを与えられ、例えばアルザス語はドイツ語という外国語の方言として見なされたため国内の地域語としては認められなかった。その後、これらの地域では彼らの言語が「方言 (dialect)」や「俚言 (patois)」ではなく「地域語」であることを示すために辞書の作成や正書法の整備が行われ、後にこれらの言語は地域語に加えられた。だがゲルマン系の言語であるアルザス語は複数の地域変種が存在しており、正書法が確立していないため地域語教育の枠組みでは標準ドイツ語が教えられてきた¹。さらにアルザスでは第二次世界大戦後、反ゲルマンの動きが高まり、親から子への言語継承が減少したこともアルザス語を急激に衰退させた要因である。このように、アルザス語はフランス国内の他の地域語と比較しても、言語的のみならず社会や政治的にも難しい状況に置かれてきた地域語の一つである。

¹ アルザス語は単一ではなく複数の形を持つ言葉であるが、非公式インタビューにおいてインタビューが「アルザス語」と語るものがどの方言を指すのかについては踏み込んで尋ねていない。そのため彼らが想定する「アルザス語」が異なる地域のものである可能性がある。

3. [事例] アルザス地域における言語研究

本研究の調査地であるアルザス地域は国境地帯に位置し、フランス語、ゲルマン系のアルザス語の様々な変種、標準ドイツ語、そして Welsch と呼ばれるロマンス系言語など複数の言語が存在し、それらが接触する地域である。特に第二次世界大戦後にライン川が国境として画定するまでアルザス地域はフランスとドイツの間を行き来していたため、日常的にフランス語・アルザス語・ドイツ語をはじめとする複数の言語が使用される空間であった。このような複数の言語が接触する地域は様々な視点から注目され、異なる手法での研究が行われてきた (Boughton & Pipe, 2020)。フランス語とアルザス語の間の言語選択、使用、話者の態度、コードスイッチングなどの現象を扱ったものや (Boughton & Pipe, 2020; Gardner-Chloros, 1991; Vassberg, 1993; Vajta, 2004)、アルザス語の言語的特徴やそれが経てきた歴史に着目した研究が行われてきた (Philipps, 1965; Beyer and Matzen, 1969; Bothorel-Witz et al, 1984)。表 1 は 1962 年時点のアルザスにおける言語話者数を示しているが、複数の言語を話す人の割合が多く、アルザス語話者が最も多いことが分かる。表 2 は 1962 年から 1998 年の話者数の割合を示しており、若年層において著しく減少傾向にあることが示される。2012 年に OLCA が実施した最新の調査によれば、43%の人が理解し話す能力を持つ、25%が理解しない、10%がよく理解し少し話す、5%が少し理解し話すことができる、17%が理解するが話すことができないという分布を示す。つまり部分的にアルザス語の能力や知識を持っている人は75%程度である。

表 1 フランス語アルザス語ドイツ語の言語知識の割合 (1962)

年齢 (歳)	フランス語	アルザス語	ドイツ語
5-9	81.73%	77.05%	3.52%
10-19	98.17%	81.10%	34.66%
20-29	98.40%	81.49%	62.39%
30-39	96.62%	84.42%	78.13%
40-49	94.44%	85.20%	80.49%
50-59	76.02%	91.64%	87.17%
60-74	44.89%	93.88%	90.61%
75-	35.18%	93.74%	89.08%
全世代	82.52%	85.71%	65.19%

表 2 1962 年から 1998 年での年代別アルザス語話者

年齢 (歳)	1962	1979	1986	1991	1998
18-24	82.40%	65.50%	52.20%	40%	37%
25-34	86.40%	64.30%	58.40%	N/A	44%
35-49	86.90%	71.50%	73.30%	N/A	65%
50-64	92.60%	84.20%	85.30%	N/A	75%
65-74, 65以上	94.60%	88.30%	90.70%	N/A	84%
全世代	84.70%	74.70%	71.70%	67%	62%

4. 研究手法

上述した背景に基づき、本研究ではどのように公共空間の中でアルザス語が現れ、そして人々によって認識されているのかという点を明らかにするために 1) ストラスブールの三つの広場周辺での言語景観調査、2) 非公式インタビューという二つの手法を用いて発表者が調査を実施した。ストラスブールでの現地調査は 2019 年 7 月中頃から 8 月にかけて行った。Landry & Bourhis (1997) によって明確な定義が与えられた言語景観調査は公共空間における言語は通行人に意味を伝達するだけでなく、公共空間において可視化されることで象徴的な意味を持つと捉える。言語景観研究は、欧米では言語がどれだけコミュニティにおいて力を持っているのかという、コミュニティのバイタリティを測るために使用されてきた。しかしそれだけではなく、都市における複雑に絡み合った多言語状況を整理するための一つの手法としても使用されてきた。日本の山手線沿線で調査を行なった Backhaus (2012) は、日本においては英語やフランス語などの言語が非常に多い割合で現れていることを示し、英語やフランス語が伝達する意味が必ずしも重要なわけではなく、それらの言語が持つ洗練さや国際的なイメージに導かれた使用がされていることを示す。また言語景観研究では公共標識と私的標識を区別し分析を行うため、本研究も同様の方法を用いることとした。政府や地方行政機関が作成する公的標識とカフェやレストランなどが作成する私的標識を、それらの標識の大小に関わらず広場周辺で採取した。非公式インタビューは広場周辺の小売店 (カフェ・レストラン・化粧品・装飾品店など)、広場中心で定期的に行われている古本、観光案内所にて実施した。さらにアルザス語普及団体である Office pour la Langue et les Cultures d'Alsace et de Moselle (OLCA)、アルザス語を話す 20 代のストラスブール大学の学生に対して半構造化インタビューを用いて計 8 人へのインタビューを行った (表 3)。日常での言語使用状況、そして出身地や家族間での言語使用、アルザス語使用者に対してはアルザス語使用などを会話の糸口とし、聞き取りをおこなった。インタビューは広場で即時的に行なったものや、予め録音を依頼したものに分けられた。即時的に行なったものでは、発表者が参与観察ノートに書き込んだものを後ほど整理し、分析に使用した。

表3 インタビューイの情報

名前 (仮名)	年代	職業	出身地
Valérie	60代	古本市の書店員	アルザス (ヴォージュ山脈周辺)
Cédric	50代	古本市の書店員	アルザス (セレスト)
Ludovic	60代	古本市の書店員	アルザス
Pauline	50代	観光案内所の店員	アルザス (ミーテスハイム)
Laurence	30代	アルザス・モーゼル言語文化事務所職員	アルザス (ストラスブール)
Arnaud	20代	学生 (ストラスブール大学)	アルザス (ソンダーナッハ)

5. 結果と分析

上述した二つの手法に基づいた研究結果を以下に示す。まず言語景観調査では公共標識 68 枚, 私的標識 266 枚を撮影した。公共標識は街路名やポスターなどである。イベントのポスターなど判別が難しいものは「Strasbourg.eu/eurométropole」という印字がしてあるものを公的標識として扱い, レストランやカフェなどの標識は私的標識として扱った。公共標識, 私的標識ともにフランス語による一言語表記が最も多く, 次いでフランス語, 英語, ドイツ語という三言語表記である。街路名はフランス語とアルザス語で示される。フランス語が上部に書かれ, 下部にアルザス語が書かれる。アルザス語は公共標識においては街路名を示すために用いられた。それに対して私的標識ではアルザス語の出現頻度は低いが, アルザス語の伝統料理などの名称には使用されている。



図1 左: 公共標識, 右: 私的標識

非公式インタビューからは人々のアルザス語への態度や認識における差異を観察することができた。アルザス語を過去の言語として捉え, 下位言語としての「パトワ」であると明言する人がいる一方で, アルザス語はアルザスの文化や生活, 伝統の核を為しているのだと強調する人もいた。さらにアルザス語の衰退の原因は戦後のイメージの悪化であることを明確化した上で, アルザス語の復興と活性化を行うためには, まずアルザス語に対する考え方やイメージを変えていく必要があるという意見もみられた。アルザス語への捉え方は個人によってばらつきがあるが, 職業と年代が彼らのアルザス語への意識に関わりがあることが示唆できる。若年層, 中年層はアルザス語に対して中立もしくは積極的に使用や継承について言及し, さらにアルザスの歴史や伝統について扱う職業についている方は, 言語の継承や使用に対して積極的である姿勢がみられる。したがってアルザスの伝統文化や歴史と言語というのは彼らの中で結びついていることがわかる。

表4 非公式インタビューでの結果

名 (仮名)	
Valérie	<ul style="list-style-type: none"> • “L’alsacien, ce n’est pas la langue préférée. Je préfère l’italien et l’anglais.” (アルザス語, それは私の好きな言語ではない, 私はイタリア語と英語の方が好きである。) • “L’alsacien, c’est la langue disparue.” (アルザス語は, それは消滅した言語である。) • “L’alsacien, la langue lourde, pas la langue légère, de beauté.” (アルザス語, 重い言語, 軽くない, 美しくない言語)
Cédric	<ul style="list-style-type: none"> • “L’alsacien est la langue secrète.” (アルザス語は, 秘密の言語である。) • “L’alsacien, la langue sèche.” (アルザス語, 乾燥した言語)
Ludovic	<ul style="list-style-type: none"> • “L’alsacien, c’est le patois, le dialecte.” (アルザス語, それはパトワ, 方言である。)
Pauline	<ul style="list-style-type: none"> • “Je leur parle beaucoup l’histoire et tradition. Je suis très alsacienne. Mais, ce que je regrette, c’est que je relègue parler plutôt ça je regret que je ne pas l’avoir fait.” (私は, 彼ら (子供や孫) に (アルザスの) 歴史と伝統についてたくさん話します。私は

	<p>とてもアルザス人です。しかし、私が後悔しているのは、それ（アルザス語を話すこと）をしなかったことよりも、彼らとアルザス語を話すことを放棄したことです。）</p> <p>・“<i>Ce serait dommage que ça disparaît complètement. Je ne suis pas d'accord, non plus (c'est disparu). Mais... je pense que c'est important de garder, c'est la racine</i>”（アルザス語が）完全に消滅してしまうのは残念です。私はアルザス語が消滅したとは思っていません。しかし私はアルザス語を守ることが大切だと思う。それはルーツ。）”</p>
Laurence	<p>・“<i>C'est nous, travaillant à l'OLCA, d'essayer d'associer d'alsacien à quelque chose positive de nouveau. Les jeunes qui trouvent que c'est plutôt sympa, l'alsacien. Donc, voilà on essaie un petit peu de changer aussi des mentalités</i>”（OLCAで働く私たちは、アルザス語を何か新しい肯定的なものに関連づけようとしている。若い人たちが「良い」と思えるアルザス語。だからここで私たちはアルザス語への見方（考え方）を少し変えようとしている。）</p>
Arnaud	<p>・“<i>(L'alsacien) C'est un peu une forme d'identité justement de la région, le dialect. Donc après qu'il disparaît, ce serait dommage. Ce serait un peu dommage pour tous les français.</i>”（アルザス語）それはアイデンティティの一種で、特に地域の。だからアルザス語が消滅した後それは残念です。それは全てのフランス人にとって残念です。）</p> <p>・“<i>(L'alsacien) Ça, c'est pratique</i>”（アルザス語）それは便利である。）</p>

6. 結論

本論文はフランスのアルザスにおける地域言語の状況を観察することにより、現代社会における地域語の新たな道を導き出すことを目的してきた。アルザス語は公共空間においては少数ではあるが、地名や伝統料理などのアルザスの歴史と関わりがあるものとして使用されていることが示された。非公式インタビューからはアルザス語に対する意識には多くの幅があることが明らかになった。その中でも特に年代と職業は彼らの地域語への意識形成に関わっていると分析できる。上述したように、フランス国内の地域語は現在まで適切に扱われてこなかったことからアルザス語も衰退傾向にあるが、地域の歴史や文化と密接に結びついている地名や伝統料理にはアルザス語が使用され続けていることが分かった。さらに人々の間でもアルザス語の使用や継承に対して積極的な姿勢を読み取ることができ、彼らのようなアルザスの文化や歴史に関心を持つ人々の動きを活発化させることが一つの有効な方法であると結論づける。本調査はストラスブールという都市部での調査結果に基づいた分析だが、地域語の使用や意識は非都市部においては異なった使用や意識が観察されると推定できる。今後はアルザス語が日常生活においても使用されている村での調査を継続して調査考察していきたい。

参考文献

- Backhaus, P. (2007). *Linguistic landscapes: comparative study of urban multilingualism in Tokyo*. Bristol: Multilingual Matters.
- Beyer, E. and Matzen, R. (1969). *Atlas linguistique et ethnographique de l'Alsace*, Volume I. Paris: Editions du CNRS.
- Bothorel-Witz, A., Philipp, M. and Spindler, S. (1984). *Atlas linguistique et ethnographique de l'Alsace*, Volume II. Paris: Editions du CNRS.
- Boughton & Pipe (2020). Phonological variation and change in the regional French of Alsace: Supralocalization, age, gender and the urban-rural dichotomy. *Journal of French Language Studies*, 30, pp. 327-353.
- France's Constitution of 1958 with Amendments through 2008 (2008). Retrieved January 9, 2022, from https://www.constituteproject.org/constitution/France_2008.pdf?lang=en
- Gardner-Chloros, P. (1991). *Language Selection and Switching in Strasbourg*. Oxford University Press: UK.
- 長谷川秀樹 (2000). 「現代フランスにおける言語問題—地域語と欧州少数地域言語検証をめぐって」, 『立命館国際研究』, 12(3), pp.455-472.
- Landry, R. & Bourhis, R.Y. (1997). Linguistic landscape and ethnolinguistic vitality: An empirical study. *Journal of Language and Social Psychology*, 6, pp. 23-49.
- Office pour la Langue (2012). Etude sur le dialecte alsacien. Retrieved January 9, 2022, from https://www.olcalsace.org/sites/default/files/documents/etude_linguistique_olca_edinstitut.pdf
- Vajta, K. (2004). *'Nous n'avons plus de langue pour nos fêtes de famille': Le changement de langue dans une famille alsacienne*. Göteborg: Acta Universitatis Gothoburgensis.
- Vassberg, L. (1993). *Alsatian Acts of Identity*. Clevedon: Multilingual Matters.